

月桃の花に思いを寄せて

南城市立玉城中学校 二年 知念琉杏

頭のスクリーンに映し出されたのは

戦の姿 家族の悲劇

おじいの語る戦は

道端で香りを放つ月桃が

静かに優しく語っているみたい

昭和二十年三月

おじいは十三歳

浦添から首里へ

しばらくして兄弟二人の命が散った

逃げ場のないおじいが身をひそめたのは

お墓の中

そして具志頭の山の中

志喜屋から百名を経て前川へ

十三歳のおじいは命のために逃げた

長い戦は終わりを告げるが

苦しかった

大人は仮小屋を作り

おじいたち子どもは

芋を探して遠くまで歩いた

やせた土地に植えた芋や野菜が

おじいたちの唯一の食べ物となり

お腹を満たし 命をつないだ

青の美しい中に豊かに生きる私

生と死の狭間を生き抜いたおじい

そんなおじいの語る戦は

私にとって映画のようにしか

私のスクリーンに映し出されない

おじいの十三歳にすみついた辛さ

立ち直れないほどの体験は

おじいを強くした

だからそんなおじいの目は優しい

私の尊敬する大好きなおじいには

月桃の香りがよく似合う

今日も月桃の花が優しい風に吹かれている

あの日の全てを静かに見つめていた

月桃は決して語らないが

戦のむごさを

花の優しい色と癒しの香りで

私に教えてくれる

そんな戦を私は許さない

月桃が優しく揺れるたび

私は青い海と空に誓う